



徳源寺本堂。入母屋屋根、平入り（建物表面の垂直方向に入口を設置する方法）で、正面中央に唐破風をつける。本堂内の位牌堂は秋田式といわれる。



長久丸の船給馬（正面左）。年代不明。佐藤長右工門が奉納。26.3×37.6cm。



龍神堂内。上部中央に龍神の扁額、左右に船給馬がある。



金比羅丸の船給馬（正面右）。明治13年5月、塩谷村の杉田喜代八が奉納。帆と化粧金に印が記載。38.2×26.5cm。



狛犬。北前船で各地に運ばれた笏谷石製。出雲狛犬の「構え獅子」型。



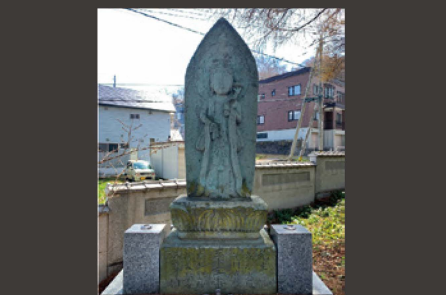
龍神堂の龍の彫刻。柳田忠吉の作。



右手の本堂と龍神堂は連結されている。



龍神堂裏には2種類の三十三観音が交互に並ぶ。水色の観音が笏谷石製。移転後から現在までの様々な石碑もある。



笏谷石製の三十三観音。本堂前に「三十三番」、他は龍神堂裏に設置。明治30年9月建立。

徳源寺龍神堂
(小樽市塩谷 2-25-1)
明治30年に建てられた本堂とほぼ同時期の建築と推定。木造。北海道の禅宗寺院に見られる本堂と龍神堂を併置する形式は、龍徳寺金比羅殿と同様。平成4年、屋根銅板を葺き替えている。棟梁は明治から大正期に小樽・札幌で活躍した福井県出身の伊久治三郎(1860-1927)。伊久は札幌神社社殿(1913年)、水天宮本殿・拝殿(1919年)、浄心寺本堂(1922年)等を手がけた。平成6年、本堂が小樽市指定歴史的建造物に指定(第59号)。平成7年、龍神堂の横のクロマツ、本堂左のイチヨウが小樽市の保存樹木に指定。



徳源寺龍神堂

北前船遺産が数多くのこる、船乗りたちの信仰拠点

小樽の塩谷地区にある徳源寺は、江戸時代末期の文久2(1862)年、松前の法源寺23世和尚が幕府の許可を得て同寺の説経所として開創した由緒ある曹洞宗寺院である。小樽市指定歴史的建造物の本堂、小樽市指定保存樹木のクロマツとイチヨウなど、見どころは多いが、最近、小樽商科大学の調査によって船給馬、越前産の笏谷石製奉納物などの北前船遺産が多数のこっていることが確認された。法源寺説経所が塩谷に開創されたのは、当時、忍路場所を請け負っていた運上屋支配人・田端孫七の尽力と支援によるところが大きい。開創の翌年、文久3年3月28日、寺号を徳源寺と公称した。古平の禅源寺、石狩の曹源寺と並び、曹洞宗の北海道開拓寺院「三源寺」と呼ばれたが、三寺ともニシン漁と共にまちが発展していった地域であることが背景にある。

当初、現在地から1kmほど海側の吉原地区に設置されたが、境内地が狭かったこと、遊郭地帯の吉原は寺にそぐわないという理由で移転することになった。小路口忠治の畑地であった現在地と土地を交換する契約が成立し、明治30(1897)年12月10日、現在地に本堂、龍神堂、庫裏が落成した。本堂と龍神堂が併置される形式は、北海道の曹洞宗寺院に見られる特徴で、龍徳寺金比羅殿も同様である。龍神堂の祭神「八大龍王」は、山形県の善寶寺から勧請されたと伝わる。龍神は漁業や海運業者た

ちの守護神として、北海道、東北、北陸などの日本海沿岸各地を中心広く信仰を集めた。龍神堂内には船給馬が2面奉納されている。船給馬は、江戸中期以降、北前船主など船乗りたちが航海安全を祈願して寄港地・船主集落の寺社等に奉納した。これまでも小樽では龍徳寺金比羅殿(8面)、祝津恵美須神社(2面)で確認されているが、最も古いものは明治27年であった。龍神堂の船給馬は明治13年に廻り、現存する小樽市内最古の船給馬である。

龍神堂正面入り口両脇には越前産の笏谷石製の狛犬が設置されている。笏谷石は福井県の足羽山で産出する凝灰岩で、北前船で各地の寄港地・船主集落に運ばれた北前船文化を象徴する遺産である。龍神堂裏の境内地には、笏谷石製の三十三観音がずらりと並ぶ。この三十三観音は明治30年に越前国三國(現・福井県)から来た齊藤傳平、石工の宮崎吉平によって建立されたものである。本堂と龍神堂の棟梁・伊久治三郎も福井県出身であり、龍神堂を含め徳源寺は、海を越えた北陸とのつながりをいまに伝える遺産が数多くのこる、重要な信仰拠点なのである。

*忍路郡郷土誌では現在地への移転本堂等の建築年は明治32年とあるが棟札明治30年12月10日落成の記述に依拠した。

撮影：落合亮(小樽商科大学吉野部) 文章：高野宏康(小樽商科大学委員研究員)